

2002

# 図書館に関するグラフィック

Sign System for Library

AD03 阿久津 悠希  
指導教員 西野 隆司

## 1. 研究目的

インターネットの台頭や書籍価格の高騰により「紙媒体離れ」が懸念されている。同様に子供たちの学校図書館の利用率の低下が指摘されるなど、「図書館離れ」が増加傾向にあることが報告されている。一方で電子媒体の出現により紙媒体の、利点について改めて見直されている。本研究では「図書館離れ」の解決策を模索し、子供たちを対象とし本との触れ合いが身近になるような提案する。

## 2. 調査と分析

一般的な図書館は大人向けに蔵書の案内がなされており、一部の場所や施設を除いては子供向けに特別な配慮がなされていない事に着目した。まず、大人を対象に「現行の図書館のグラフィック(表記物)が子供向けに配慮されていると思うか」というアンケートを取った結果、以下の事が分かった。

- ・角があるものがあり子供が触った時けがをする恐れがある。
- ・どれも同じ形をしていて面白味がない。
- ・視認性が低い。
- ・小さい子供には見えにくい高さにある。

## 3. コンセプトの立案

「ふれあい、やさしさ」

子どもたちと保護者の方がふれあうきっかけになり、子供向けに配慮した表記物の提案。

## 4. デザイン展開

図書館内にある子供のコーナーにある本棚は背が低いタイプになっているため、子供が触っても平気なよう安全性を配慮する。素材はクリアラベルシートに印刷したものを塩化ビニル板に貼るとし、角を丸く落とすとする。

形は公共の図書館は日本十進分類表(NDC)が使われているため、そのジャンルに合わせて表記を制作していくとする。

色を明るくしすぎると図書館の雰囲気を壊してしまうので、なるべく原色に近い色は使わず、淡色を主体として制作していく。

配色は基本は白黒で型を作り、それぞれのイラストに合った淡い色での配色をし、優しい色合いにしていく。書体は全て統一し、堅いイメージを与えないように、少し丸みを帯びた書体を使用する。

## 5. 完成図



## 6. 結論

外観について

2種類のタイプの形を提示して意見を聞いた。

第1案：壁に掛ける額縁型。

第2案：本棚に直接置くスタンド型。

この二つで高評価だったのはスタンド型のデザインで、その中でも動物のイラストが描かれた物が高評価を得た。

・今回、制作の舞台としている図書館で働いている橋本図書館の図書司書の方にデザイン展開を見てもらうために連絡した。展開結果としては、まず構造について、対象が子供の為もし棚から制作物が落ちたりして子供が触った時にけがをせぬように、角は丸く切り揃えることによって怪我を未然に防ぐことができる。

・動物や道具、様々な形をとることによって一目でそこに何の書籍が陳列しているか分かり、更に子供が親に形についての質問をしたりすることによって親と子のコミュニケーションが増え、子供たちには物の形などに関心を持ってもらうことができるだろう。

## 7. 参考文献

・国会国立図書館『日本十進表分類表(NDC)新訂9版分類基準』(2010)

<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/pdf/NDCbunruikijun2010.pdf>